

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02256

研究課題名(和文)近代神道と社会との関係をめぐる研究 「誓之御柱」を中心に

研究課題名(英文) Study of relations between modern Shinto and society: mainly about "Chikai no Mihashira"

研究代表者

昆野 伸幸 (KONNO, NOBUYUKI)

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：00374869

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：3年間の研究期間を通じて、主に3つの成果を得た。第一に、学習院大学図書館に所蔵されている寛文庫について調査し、寛克彦本人の自筆書き込みや線引き等を発見した。第二に、寛克彦を近代神道史上に位置付けていくうえで不可欠な、「国家神道」概念をとらえなおすために、宗教学者・村上重良氏の「国家神道」論を1960年代の時代背景から再検討した。第三に、近代における神道の観念の表象という問題意識から、「誓之御柱」建設の実態や楠木正成に関する表象について解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

寛克彦という神道思想家の思想・営為を近代の思想史のなかにきちんと位置付けるために、実証面・理論面ともに必要な作業を行ったところに、本研究の学術的意義がある。寛文庫に寛の本音をうかがうことのできる史料を発掘したことで、より寛の思想の実態に近づくことができる。また「国家神道」概念を捉えなおすことで、当該概念のバイアスから離れて、寛の思想・営為を「下から」の視点から検討することができるようになった。

研究成果の概要(英文)：I got three result mainly by studying it for three years. First I investigated Kakei library possessed in the Gakushuin University library and discovered handwriting notes and drawing of Katsuhiko Kakei. Second I reexamined a "State Shinto" concept of Shigeyoshi Murakami to place Katsuhiko Kakei in history of modern Shinto properly. Third I analyzed it about the representation of the idea of the Shinto in modern times by elucidating it about the reality of the "Chikai no Mihashira" construction and representation about Masashige Kusunoki.

研究分野：近代日本思想史

キーワード：近代神道 寛克彦 誓之御柱 誓の御柱 国家神道

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現在、「国家神道」という学術用語・概念は、2つの意味(狭義と広義)で理解されている。狭義の国家神道は、「国家神道」を神社神道の国家管理状態に限定して理解するものであり、広義の国家神道は、「国家神道」を神社神道以外の宗教をも包含する広範な国家的宗教制度として理解する。前者としては、葦津珍彦『国家神道とは何だったのか』(神社新報社、1987年)、阪本是丸『国家神道形成過程の研究』(岩波書店、1994年)などが代表的研究で、限定的な定義のもとに緻密・堅実な制度史研究を積み重ねている。後者としては、古典的研究書の村上重良『国家神道』(岩波新書、1970年)をはじめ、近年の島園進『国家神道と日本人』(岩波新書、2010年)などが挙げられ、神道を中心とする宗教制度をトータルに描き出すことを試みている。学術的な定義の曖昧さをもつため、「国家神道」という用語の使用を放棄する研究者もいるが(新田均、山口輝臣)私は、近代日本の政治、宗教、教育、文化などあらゆる面にいたるまで、国体論・天皇崇敬が根付き、そこには神話的要素が濃厚にまとわりつき、権威化がなされていたと考えており、広義の国家神道論に与する立場である。

「国家神道」という用語は、単に日本の狭い学界だけで通用するものではなく、正確な理解がなされているかはともかく、かなり広く日本の一般社会および海外の学界に普及・定着しているものである。近代の神社・神道をめぐる諸問題を狭い神社史、制度史に閉じ込めるのではなく、宗教学、教育史、地域史、美術史などの隣接学問との架橋も踏まえて、広く一般社会や海外に向けて発信し、かつ他領域の研究者も含めた開放的な議論の場をつくるうえで、「国家神道」という用語および広義の国家神道という概念は、あくまで作業仮説としては、一定程度有効であると判断している。そして、広義の国家神道論においては、村上氏や島園氏が重視しているように、国家神道の教義は国体論に求められ、とくに島園氏は、神道的なものを中核とする天皇崇敬システムが構築され、学校教育を通じて神道的な観念と実践が浸透していったさまを論じている。しかし、その分析は、教科書の記述や学校儀式の内容からストレートに被教育者に国体論が内面化されたと判断する、一昔前の教育史研究の成果に基づくものであり、また国体論自体の把握も非常に固定的で、一枚岩的なものと見なし、その内部に多様性を認めないやや陳腐なものにとどまっている。

私は、これまで大川周明、平泉澄などの思想家を対象にして、近代の国体論の展開・諸相を思想的に分析してきており、大正期には、神話的権威と結びついた伝統的国体論の価値が低下しつつある状況を明らかにし、神話的権威に依存しない、新しいかたちの国体論が形成されつつあったことを指摘した。さらに、程度の差はあれ、伝統的国体論も新しい国体論もともに宗教的な側面をもち、その点を解明するため、近代の神道思想に注目し、星野輝興、今泉定助、葦津珍彦、二荒芳徳など様々な神道の思想家の思想・営為を検討してきた。彼らは神道の宗教性を主張し、実際の祭祀や行という宗教的実践の意義を強調した。私は、これまで文献をもとに言説研究に取り組んできたが、彼らの信仰のあり方をより深く理解するためには、言説分析だけでは不十分であることを感じていた。

### 2. 研究の目的

以上のような研究背景のもと、「誓之御柱」という分析対象は、広義の国家神道研究および自身の国体論研究に対し、新しい可能性を感じさせるものである。このような問題意識から、本研究は、3年計画で、「誓之御柱」に関する全体像を解明し、神話的シンボルの社会的広まりを実証的に検証することを目指した。

本研究は、近代日本において神道思想が果たした社会的役割・意義について、「誓之御柱」を手がかりに考察するものである。「誓之御柱」とは、慶応4(1868)年にだされた「五箇条の誓文」の精神を視覚的に体現するものとされた五角柱のモニュメントであり、神話的価値と結びつきながら、大正11(1922)年以降、続々と建てられた。本研究は、本研究課題の申請時において先行研究のほとんど存在しなかった「誓之御柱」を本格的にとりあげ、建設にいたる時代的・思想的背景、建設の中心となった人物の思想、建設後の評判、柱の図像の意味などを、思想史にとどまらず、地域史、観光学、美術史などの学際的、総合的な視点から解明することを目指した。「誓之御柱」について総体的な研究を進めることで、近代神道の果たした社会的役割をより鮮明に浮かび上がらせることもできるという見込みを持っていた。

### 3. 研究の方法

研究方法の柱は、「誓之御柱」建設の思想的背景をなした筧克彦および筧の影響をうけた一派の思想史的研究、全国における「誓之御柱」の所在の悉皆調査および各地の「誓之御柱」の地域史的な視点からの相互比較、「誓之御柱」の実例を通じた新しいナショナリズムの広まりと限界の解明、となる。については、筧らの執筆した文献を通じて、思想史の方法によって、彼らの思想の独自性を明らかにする。については、各自治体史や郷土資料、インターネットなどを通して情報を集め、またフィールドワークを重ねたうえで、各地で「誓之御柱」が建てられた地域史的事情を検討する。については、国家主導ではない、社会領域の側からの新しいナショナリズムを総合的な視点から明らかにする。

### 4. 研究成果

研究の主な成果としては、大きく分けて以下の3点が挙げられる。

(1) 第一に、学習院大学図書館に所蔵されている算文庫(算克彦の次男・算泰彦氏が寄贈)について基礎的な資料調査をおこなった。算文庫の全体像をつかむため、洋書・和書について現物を確認しながら、基礎的な情報を調べた。泰彦氏が寄贈した本のなかには、洋書・和書ともに算克彦の没後に刊行されたものもあり、算克彦ではなく泰彦氏の蔵書も含まれているようで、慎重に算本人のものか確認する必要があるが、算克彦本人の自筆書き込みや線引き等を確認することができた。穏やかな性格として知られた算克彦は、他者への感情的な非難などほとんどしなかったが、書き込みに示される彼の率直な感想は非常に興味深く、今後の算研究において有効な史料となることが見込まれる。

(2) 第二に、「国家神道」概念を捉えなおすために、実証的な分析に基づきながら、理論面での試論も展開した。具体的には、まず戦後日本において「国家神道」概念を普及するうえで最も大きな影響を与えた宗教学者・村上重良氏の営為を再検討し、氏にとって「国家神道」概念が1960年代における反動勢力の動きに対抗するうえでの一種の手段として見出されたものであること、そのため時代状況が変われば有効性も薄れうるものであることを指摘した。村上「国家神道」論に対しては、これまでも批判はなされてきたものの、単に学説史としてではなく、村上氏をむしろ歴史学者ととらえ、戦後知識人論として論じることで、1950年代以降の氏の営為を実証的にたどり、改めて「国家神道」概念を鍛えなおす必要性を明確にした。

次に、これまで「国家神道」の研究と国体論の研究は有機的なつながりのないまま、分断的におこなわれてきた現状を踏まえ、両者の研究を接合するための分析視角を模索し、その試みとして戦時中のスローガンとして有名な「八紘一宇」をとらえなおし、近代の神道思想家や二荒芳徳の議論を分析した。従来「八紘一宇」は侵略を正当化するイデオロギーとして、否定的な意味合いをもって分析されてきたが、搾取・抑圧の実態との乖離という視点からではなく、いわば方法としての「八紘一宇」という視座の試みである。その前段階の成果として、大正期において神道思想家、すなわち神道的国体論を唱えた人々が自己の思想を再編し、その結果、「八紘一宇」論に帰着したこと、文部省批判を意図した二荒の議論の独自性などを指摘した。

(3) 第三に、近代における神道的観念の表象とその社会的広がりという問題について、愛知県における「誓之御柱」建設と近現代における「楠公」表象という具体的対象に即して検討した。

まず水上七郎や二荒芳徳ら算学派が精力的に建設した「誓之御柱」について、愛知県での建設事例が最多にもかかわらず、これまでその理由については不明とされてきたが、その理由に関して算克彦と修養団との関係から説明した。算本人のみならず、二荒や守屋栄夫ら算学派の人物は修養団との関係が深く、とくに彼らと水上は修養団愛知県支部の主要な人物と密接な人脈をもち、支部主催の講習会を契機に愛知県に算の思想が普及されたことを実証した。算神道の社会的広がりを考えるうえで、これまで看過されてきた修養団という一つの手がかりを提供できた。

次に、楠木正成という湊川神社の祭神にして、戦前の日本において臣民の模範として称揚された人物が、近現代においてどのような表象をされたのかについて、1930年代から2010年代という比較的長期の視座から分析した。戦前においては、正成が臣民の模範とされるにしても、日本人であればだれでもなれる模範なのか、あるいはだれでもなれるわけではない理想なのかをめぐって、本来相容れない議論が併存していたこと、戦後も「楠公」顕彰論は1950年代には復活し、1960年代半ばには本格化すること、ただしそれ以降はやや沈滞し、2000年代以降に再び盛り上がるという大きな傾向について概略を示した。

以上の成果を踏まえ、今後の展望としては、算文庫の書き込みを具体的に算克彦研究に活用すること、「国家神道」概念を作業仮説としてより検討していくこと、大正から昭和初期に地域社会に広まった算神道(「誓之御柱」)が、昭和戦時期には頭打ちになる状況を迎えるのはなぜか、算らの思想を内在的に分析すること、などが考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 昆野伸幸	4. 巻 第120巻第11号
2. 論文標題 愛知県における誓の御柱	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 256 - 273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 昆野伸幸	4. 巻 第23号
2. 論文標題 近現代のなかの楠木正成 一九三〇年代から二〇一〇年代まで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文化論年報	6. 最初と最後の頁 55 - 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 昆野伸幸
2. 発表標題 近現代のなかの楠木正成
3. 学会等名 日本文芸研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 昆野伸幸
2. 発表標題 村上重良「国家神道」論再考
3. 学会等名 史学会 115 回大会日本史部会・近現代史シンポジウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

<p>1. 著者名 藤田大誠、河村忠伸、齊藤智朗、畔上直樹、青井哲人、平山昇、藤本頼生、柏木亨介、井上兼一、高橋典史、寺田喜朗、小島伸之、福島幸宏、菅浩二、田中悟、西田彰一、高野裕基、昆野伸幸、宮本誉士、金子宗徳、小川原正道、山口輝臣</p>	<p>4. 発行年 2019年</p>
<p>2. 出版社 弘文堂</p>	<p>5. 総ページ数 536</p>
<p>3. 書名 国家神道と国体論 宗教とナショナリズムの学際的研究</p>	

<p>1. 著者名 山口輝臣 藤田大誠 苅部直 前田修輔 朴輪貞 河西秀哉 昆野伸幸 須賀博志 佐々木政文 寺田喜朗 辻岡健志 北康宏 谷川穰 平山昇 三ツ松誠 小野将</p>	<p>4. 発行年 2018年</p>
<p>2. 出版社 山川出版社</p>	<p>5. 総ページ数 288</p>
<p>3. 書名 戦後史のなかの「国家神道」</p>	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----